

## P-5 直示用法における指示詞の選択原理に関する比較・対照研究

### ーオンライン実験調査

大阪大学  
菅谷友亮\*

本論は、指示詞(直示用法)を選択するために必要な遠近判断の心理プロセスに関する言語横断的な実験調査である。話者は指示詞の産出の際に聞き手(の判断)を考慮すること、または何らかの判断基準をもって遠近判断することがある。しかし、それには一定の言語文化差があると想定できるが、言語によってどのように異なるか不明である。先行研究において、言語と社会認知の関連に焦点を当てた幾つかの実験研究では、指示詞選択のための遠近判断の際に、聞き手との共同注視があるかという点で言語差があることが実証された。本論では、そのような研究の方法論を参考にしつつ、聞き手、比較対象、特定の基準値の3つの観点から条件を変化させ、6つの言語(日本語、スペイン語、アイルランド語、英語、イタリア語、フランス語)の(母語)話者に対して指示詞選択をさせる実験を実施した。実験の結果、各言語の指示詞に関して比較的観点から様々な異なる特徴が発見または実証された。

### 1 はじめに

本研究は、直示用法における指示詞の選択に影響を与える主要な要因を複数の言語において実験調査する。指示詞には、言語文脈上のある対象を指し示す照応(文脈指示)と視覚・空間的な対象を指し示す直示(眼前、現場指示)の機能があることが広く知られる。さらに言えば、後者に関連して、認識や概念上にある対象を指示する概念(観念、記憶)指示もあるが<sup>1</sup>、基本的には以上の二つの機能・用法に大別されることが多い<sup>2</sup>。本研究は後者の直示用法に焦点化し、話者が外界の空間にある視覚可能な物事に参照する場合の指示詞の使用を研究対象とする<sup>3</sup>。

そのような外界物を指示する機能はその必然性ゆえ言語普遍的(universal)に存在すると考えられる(Levinson 2018)。しかし当然、言語によって指示詞(あらゆる用法に関して)に違いがあると想定でき、例えば、その普遍的な機能と共に、「対象までの距離」や「話し手/聞き手領域の区別」等の判断がパッケージされることがあり、それにより各言語内で複数の指示詞があることが多い(Diessel 2005)。例えばフランス語では指示詞に距離判断が内包されない一方<sup>4</sup>、英語では指示詞 *this/that* により遠近の二分を含み、さらに日本語の指示詞(コアソ)は対象物が話し手側か聞き手側にあるのかの情報を伝達することがある。さらに一部言語において、地形などとの関係で空間を分割することもあるが、全体からみるとかなりの少数派である(Kemmerer 2019)。

\* 所属: 大阪大学人文学研究科、E-mail: ysugaya.hmt@osaka-u.ac.jp。本研究は日本学術振興会(JSPS) 科研費の助成を受けている(課題番号: 22K13115)。

<sup>1</sup> 以下、日本語における用例。

- (a) 赤い服の男性ですが、その方は私の指導教員です。[文脈指示]
- (b) 見てください、これは昨日梅田で買ったブラダの財布です。[現場指示]
- (c) A: そう言えば、あの本どこいった? B: どの本? [観念指示]

<sup>2</sup> 本論と直接関連はしないが、著者は、文脈指示と現場指示のどちらも指示対象は認識上(頭の中)に現れるものであるため、それらは概念指示に収斂し還元されると考える。発話の一部である言語文脈上の指示対象は話し手や聞き手の概念(短期的記憶)であり、眼前に存在する指示対象は知覚を通じた心的表象である。以上のような点から指示詞はすべて概念指示であり、かつ客観/物理的ではなく人の心理上で主観的に作用するため、使用や解釈を複雑化することが多く個体差も大きい。したがって、経験的研究の方法論として個々の用例からの一般化ではミスリードの可能性が高く実証研究としては作用せず、よって心理学や認知科学などで用いられている経験的研究手法が必要になる。人の主観や認知プロセスに還元させるのは、伝統的な客観主義と対立する主観主義や現象学的前提である。言語やそれに関する判断(指示詞選択含む)は本質的に現象学的であり、その研究手法もそれを前提とした経験的方法論を選択するべきである。

<sup>3</sup> ここで一般的な意味拡張の流れが適用可能だとすれば、指示詞において直示用法は原初的であると言える。物理的ドメインから心理的ドメインもしくは言語的ドメインへの比喩的拡張は普遍的かつ偏在的現象である(cf. Lakoff and Johnson 1980)。

<sup>4</sup> 対照的に距離判断を提示する場合には、以下のように副詞的に *-ci/-là* を名詞句に伴い表現される。

- (a) Ce livre-*ci* est intéressant.  
the book-here is interesting  
"This book is interesting."
- (b) Ce livre-*là* est intéressant.  
the book-there is interesting  
"That book is interesting."

特に、指示詞の意味に「話し手 (S) (や聞き手 (H)) から対象 (T) までの距離性」が内包されている言語が多いことは、それが広く言語をみて指示詞の本質的特徴の一つと見做せることを示唆する。ドイツ語のような指示詞における遠近の対称性が失われた言語であっても<sup>5</sup>、*der da* (= there) のような場所副詞と一緒に添えられる場合が多々あり、一般的に距離の軸は空間的位置を占める対象物を指示するための最も重要な基準となっている。但し、ほとんどの言語で2つ3つ程度の大まかな区分であり (i.e., proximal/medial/distal) 各々広い幅があるが、それでもコミュニケーションとしては実用的に問題なく成立している。しかし、空間に1つないし2つの境界線を引くという現象は概念的かつ主観的であり、それゆえに各状況において一回一回異なり (状況差)、また同じ状況でも人によって判断が異なり (個人差)、さらに異なる言語文化圏間での総体的な違い (言語/文化差) が生じると想定できる。では、眼前の事物を指し示す「直示用法」における指示詞の選択、つまりは遠近判断の境界線の線引きに関して、どのような言語/文化差があるか。それに対して影響を与える要因を言語横断的に調査することが本論の目的となる。

方法論として、本研究では実験調査を実施する。上記の研究対象や目的のため、(非) 母語話者の研究者が自ら直観的に判断 (し、それを基に理論構築) することは最適ではなく、一定数の母語話者からデータを取得し詳細に分析することではじめて、直示用法における指示詞の言語/文化差の実態が明らかになる。次の2節で提示するように、同様の研究目的により実証実験を行う研究が数多くあり、本論はそれらを参考にしつつ、3節で未だ検証されていない点の実験調査を行う。最後に4節では、実験調査のまとめを提示しつつ、方法論的な観点から示唆を述べる。

## 2 先行研究

指示詞の直示用法に関して、日本語であればコ (近称) ソ (中称) ア (遠称) を使用するが、その選択原理を明らかにする研究は古くからなされ (e.g., 佐久間 1951, Yoshimoto 1986)、他言語と比較・対照させる研究も少なからずある (e.g., 服部 1968, 史 2011)。さらに最近では、様々な言語で同用法に関して実証実験を行う研究が増えてきており (Coventry et al. 2008, Peeters et al. 2014, Peeters and Özyürek 2016, Piwek et al. 2008, 時本 2015)、以下で特に本論と関係するものを一部紹介する。

まず、スペイン語 (*este, ese, aquel*) と英語の指示詞を比較実験した Coventry et al. (2008) は、長い机の端に実験参加者 (S) を立たせ、(a) 対象物 (T) を S から様々な距離に置き、どの指示詞を使用するかを観察した (記憶ゲームを行いその中の発話をデータとした)。その際に、(b) 実験実施者 (H) を S 側もしくは机の逆側に配置する、(c) S に道具 (stick) を持たせペリパーソナルスペースを拡張させる、(d) 直前に S に T と関わらせるということをして環境・条件を変化させた。以上の (a) から (d) を説明変数として、近称 *this/este* の使用率 (割合) を目的変数とした。結果、英語では (a) (c) (d) の要因が有意に影響を与えた。特に (d) の要因に関してはスペイン語より強く作用した。スペイン語では、(a) から (d) まで全て有意に影響を及ぼした要因であり、よって (b) に関して、つまり H の位置関係に関しては、スペイン語でだけ指示詞選択に対して有意な効果があった<sup>6</sup>。

次に、指示詞使用時における共同注視 (joint attention) の働きに焦点化した Peeters et al. (2014) は、オランダ語話者に対してスクリーン上に刺激が提示されるコンピュータ実験を実施し、様々な状況を示す写真の中に共通して現れる男性から出る (発話内容を示す) バルーンに指示詞 (e.g., *dit/die*) や定冠詞を挿入する課題を被験者に行わせた。写真の中の条件の違いつまり変数として、(i) 対象物 T までの距離が4段階、(ii) 机を挟み話し手 S の向かいにいる聞き手 H が T を注視しているのか他の場所を見ているか、(iii) S が T を指差ししているかどうかの3点である。結果、(a) 指差しに関して、定冠詞の場合は指差しがないとき、指示詞の場合は指差しがあるときでそれぞれの使用率が上昇した。また、(b) オランダ語の近称指示詞 (proximal demonstratives) は S 中心に選択され、聞き手が注視することは考慮されなかったが、(c) 遠称指示詞 (distal demonstratives) は S からだけでなく H からの観点も考慮され、個別言語内でも指示詞によって違いが見つかった<sup>7</sup>。

最後に、本論に最も関連する研究である Rubio-Fernandez (2022) では、スペイン語、トルコ語 (*buna, şuna, ona*)、英語 (*this, that*)、日本語 (*kore, sore, are*)、カタラン語 (*aquest, aquell*) を対象言語として、crowdsourcing で実験参加

<sup>5</sup> 元々、近接する対象 (proximal) には *dieser* (= this)、遠い場所にある対象 (distal) には *jener* (= that) が使用されたが、後者は現在特別な文脈でしか用いられず、代わりに遠近判断が含まれない *der* 系の冠詞が使用される (Yoshida 2014)。

<sup>6</sup> この研究において興味深くユニークであるのは (c) (d) である。どちらも心理的距離を縮める (近接領域を拡張する) 要因であり、本研究により解釈すれば (c) に関しては「手 (スティック) が届く」という基準値 (Standard, St) に関係し、(d) に関しては S が持つ「親しみ」という背景尺度 (Background scale, BS) に関連する (Sugaya 2015, 2020)。また、後者に関して広く取れば、好みを持つものに対して「親近感」を感じて近称を使うという "affective *this*" と同様の現象であると考えられる (Lakoff 1972, 田窪 2010)。

<sup>7</sup> この理由に関しては十分な議論はなく不明である。ただ、実験結果として、近称の方でも共同注視がある状況の写真でその指示詞の選択率は多少上がり、遠称の場合と大差があるとは言えない。一可能性として本論の英語 *that* の結果のように、「相手側」という意の遠称が使われたかもしれない。また興味深いのは定冠詞の場合であり、定冠詞は共同注視を伴いづらいという指示詞の場合と対照的な結果が見られた。



図1 Rubio-Fernandez (2022) で使われた視覚刺激例。

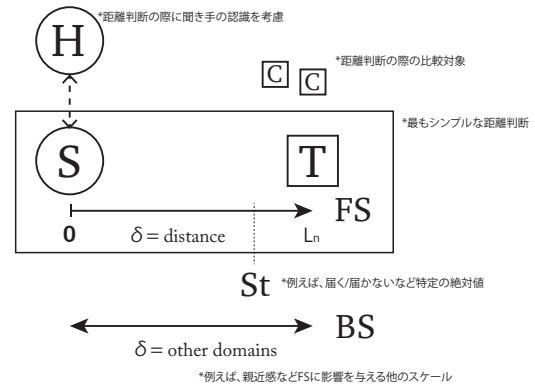


図2 直示 (現場指示) 用法における指示詞の概念構造 (Sugaya (2022) を元に改変)。

者を募りオンライン実験を実施して、図1のような絵を視覚刺激として指示詞選択をさせた。同研究は Peeters et al. (2014) と同様に、言語と社会認知 (social cognition) という観点を重視し、聞き手 H (図内のピンク色の服の女性) の位置と注意 (attention) に対する話し手 S (= 実験参加者) の感受性 (sensitivity) の程度を言語横断的に比較実験調査した。結果、以下が明らかになった。(i) スペイン語では人称指向 (person-oriented) で H の位置が影響を与える一方、英語では距離指向 (distance-oriented) で H の位置は殆ど考慮されなかった。(ii) 日本語とトルコ語はどちらも3種類の指示詞システム (three-way system) だが、前者でのみ共同注視の性質がみられ、指示詞の種類数は重要ではなかった。(iii) カタラン語とスペイン語のバイリンガルに実験を行うと、前者 (母語) の影響を受けたスペイン語の指示詞使用がみられた。最後に、(iv) 日本語やスペイン語で H の注意が影響を与えることに加え、トルコ語の *şu* の機能である「注意先の修正」 (attention correction) が実証された。しかし、同論の不十分な点は、特に日本語を扱う場合において、ただ H との共同注視ではなく、S 側/H 側領域を区分するという視点が全く考慮されていないことである。

#### 理論的前提に関する先行研究

実験調査の前に理論的前提を示す。Sugaya (2022) は、指示詞 (直示用法) の日中対照実験のために図2のような概念構造を提案した。最低限の要素としては四角で囲まれている部分で、話し手 S が距離ドメイン  $\delta$  上の  $L_n$  の地点にある対象物 T に対して判断を行うが、その際に以下のように周辺的要素が関連する可能性がある。(1) 上記の研究のように S が聞き手 (H) の存在を考慮する、(2) 親近感の程度など他のスケール (BS) が FS に影響を与える、(3) 比較対象 (C) があり相対的判断になる (i.e., 比較して近い/遠い)、(4) 届く/届かないなどのような特定の基準値 (St) がある。以上が各々図式化されており、それらを前提として本研究での実験デザインがなされた。

### 3 実験調査

本実験は、Rubio-Fernandez (2022) を中心に前節で提示したような先行研究の手法や結果を参考にした。ここでは、指示詞における遠近判断の自己中心性 (egocentricity) もしくは間主観性 (intersubjectivity) をメインテーマとして言語間比較を行うものが多かった。同研究は crowdsourcing を利用して様々な国から実験参加者を募集し、翻訳された同内容の実験をオンライン上で複数の言語話者に対して行った。本実験では、対象物 (T) の位置だけでなく、さらに聞き手 (H)、特定の基準値 (St)、比較対象 (C) という3つの観点から条件を様々に変えて視覚刺激を作成し、ブラウザ上でオンライン実験を実施し、実験データを得て分析を行った。対象言語は日本語 (J)、スペイン語 (S)、アイルランド (ゲール) 語 (G)、英語 (E)、イタリア語 (I)、フランス語 (F) の6言語であり、それぞれの (母語) 話者からデータを取得した。結果として、各言語に関して比較的観点から様々な使用の差異が発見そして実証された。当然、一実験の結果に過ぎず追試により検証が必要あるが、得られた結果は経験的であり今後の研究への十分な示唆がある。

#### 3.1 実験参加者と研究対象

本実験は crowdsourcing を利用して実験参加者を募集した。システム上、地域や母国語などに関して制限できるが、実験参加の同意後に年齢、性別、第一言語、居住国を尋ね、母語判断として妥当かどうか確認した。各言語の実

験参加者は、日本に居住する 23 名の日本語母語話者 (年齢:  $M = 41.40$   $SD = 8.38$ , 女性 7 名)、スペインに居住する 26 名のスペイン語母語話者 (年齢:  $M = 36.58$   $SD = 11.94$ , 女性 8 名)、アイルランドに居住する 25 名のアイルランド (ゲール) 語話者 (年齢:  $M = 32.64$   $SD = 9.24$ , 女性 14 名)<sup>8</sup>、アメリカ若しくはイギリスに居住する 17 名の英語母語話者 (年齢:  $M = 33.50$   $SD = 9.21$ , 女性 6 名)、イタリアに居住する 17 名のイタリア語母語話者 (年齢:  $M = 30.35$   $SD = 8.67$ , 女性 8 名)、フランスに居住する 16 名のフランス語母語話者 (年齢:  $M = 31.21$   $SD = 7.16$ , 女性 5 名) である。以上に当てはまらない場合、実験結果から排除された。

当然、各対象言語の基本的な指示詞システムは異なる。日本語、スペイン語、アイルランド語は 3 つの対照的な指示詞がある。日本語は *ko-/so-/a-* の 3 種類 (e.g., *ko-re*, *so-ko*, *a-no*) で近/中/遠称の対立に加え、S 側の領域 (*ko-*)、H 側の領域 (*so-*)、それ以外 (*a-*) の人称区分があるとされる (佐久間 1951)。スペイン語では、男性単数形で *este/ese/aquel* の 3 区分であり (e.g., *este libro* 「この本」) 順に距離が離れ、Rubio-Fernandez (2022) では聞き手からの距離からも影響を受け person-oriented であることが実証された。アイルランド (ゲール) 語では、同様に *s(e)o/sin/si(ú)d* があり距離区分がなされる (e.g., *tigh so* 「この家」) (Forbes 1848, 2010)。英語とイタリア語はそれぞれ 2 種の対照的指示詞をもつ言語であり、前者は *this/that* で後者は *questo/quello* (男性単数主格) である。最後に、フランス語は指示詞自体には距離判断が含まれず (distance-neutral)、*-ci* や *-là* などの副詞によりそれを表す (e.g., *ce livre-ci*, *ce ce livre-là* 「このあの本」) (Diessel 2005)<sup>9</sup>。

### 3.2 呈示刺激と手続き

本実験は、視覚刺激として絵により状況 (S の主観的視界) を提示し、それを基に指示詞を選択させた。視覚刺激は図 3,4,5,6 に実験結果と合わせて示される。セクションは前半/後半 2 つあり、各セクション内においてランダムに刺激が呈示される。1 つ目が会議室に長机がありその横側に座っている女性 (H) に話しかける状況である。図のように H は 4 段階 (H1-H4)、T は黒色のクリップで 3 段階 (T1-T3) の距離がある。特定の基準値 (St) として T1 と T2 の間にパーティションが設けられることがあり、また、T1 の前や T3 の後ろに比較対象 (C) として赤色のクリップが配置されることもあった。2 つ目が部屋の中に H が S の対面もしくは隣にいる状況で、四角いテーブル上に赤ペンが図 6 のように配置された (図では便宜上同時に提示)。以上に合わせて文章刺激としては、「この/(その/) ああ黒いクリップ (赤いペン) は昨日私を買ったものです。」という内容の文を各言語で呈示した。

本実験は PsychoPy® というオープンソースソフトウェアを利用し構成した。実験本体であるセクションが 2 つあり、それぞれ同じ手続きである。最初に instruction があり、各視覚刺激 (絵) の呈示前に文章の選択肢が表示され、各指示詞が含まれる文もしくは「どれも当てはまらない」を選択できる。前半のセクションが 8 (H1-4, St1-2, C1-2) × 3 (T1-3) = 24 トライアルあり、後半が 2 (H1-2) × 9 (T1-9) = 18 トライアルあり、この実験はフィラーは含まれない。以上終了後にコードが発行されるので、実験参加者はそれを参加申し込みページに打ち込み £1.2 (約 200 円) を得た。

### 3.3 結果と考察

まず前処理として、得られた実験データの内、反応時間 (RT) が 0.6 秒以下 10 秒以上のものは反応として不適切と判断し実験結果から排除した。前半セクションの結果は図 3-5 に示され、そこでは各言語において各指示詞が使用される全体との割合が算出されている。それぞれ図 3 は聞き手 (H) の位置関係、図 4 は基準値 (St)、図 5 は比較対象 (C) の影響に焦点を当て視覚的に結果が示される。一貫して、黄/緑/赤はそれぞれ近/中/遠称の指示詞を表す (E, I, F は黄/緑のみ)。また、後半のセクションの結果は表 1 に纏められる。紙面の都合上、同表は割合の数値だけで結果を提示する。以下で、割合を様々に比較しながら各言語ごとに分けて実験結果を考察する<sup>10</sup>。

最初に、日本語であるが、まず基本的に一貫して T1-T3 と S から距離が離れるに連れて近称 *ko-* が減り遠称 *a-* が増えるという当然の結果が現れた。その上で H の影響だが、共同注視が働いており egocentric な距離判断ではないように見える。例えば、H1-H4 の T3 の結果を見ると、H が S に近づけば近づくほど遠称 *a-* が増えており、相互主観性により T3 がより遠くに感じていることを示す (これは表 1 の結果からも明らかである)。次に St に関して部分的に影響があるようだ。つまり、仕切りの前の T1 がより近く、T2/3 がより遠くに感じたようで、例えば T1 の結果に目

<sup>8</sup> 内 6 名のみが、アイルランド語もしくはゲール語が第一言語であると答えた。アイルランドではアイルランド語と英語が公用語であり、前者は失われつつある。実験参加者がどの程度アイルランド語の能力を有しているかを計ることはできないため、その意味では実験結果にも不透明さが残る。本論では、実験参加者は全てアイルランド語を完全に理解・使用できるという前提で実験結果が示される。

<sup>9</sup> 但し、近距離の場合は *-ci* を付与せずとも十分な場合がある。

<sup>10</sup> 紙面の都合上、本節では割合の数値比較による考察のみを提示し、統計的分析の結果は発表の場で提示したい。

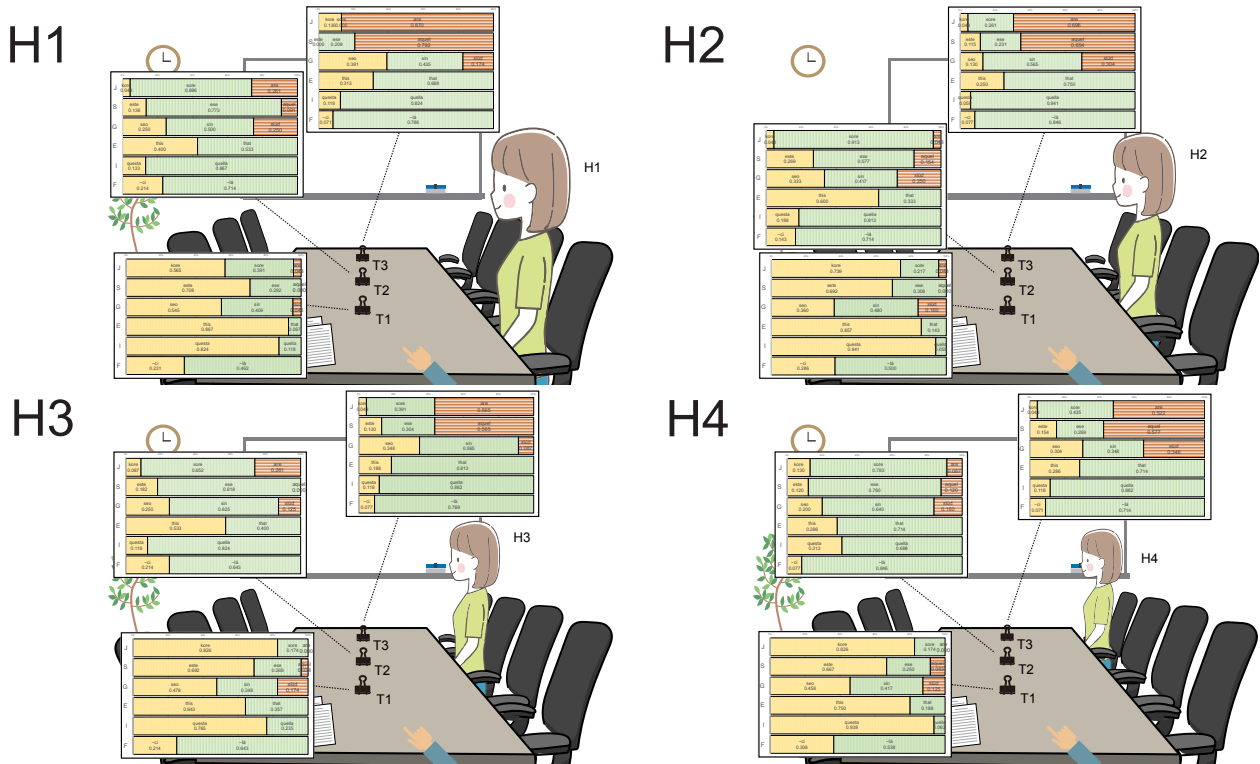


図3 視覚刺激例と聞き手(H)の位置に関する実験結果: 日本語(J)、スペイン語(S)、アイルランド(ゲール)語(G)、英語(E)、イタリア語(I)、フランス語(F).

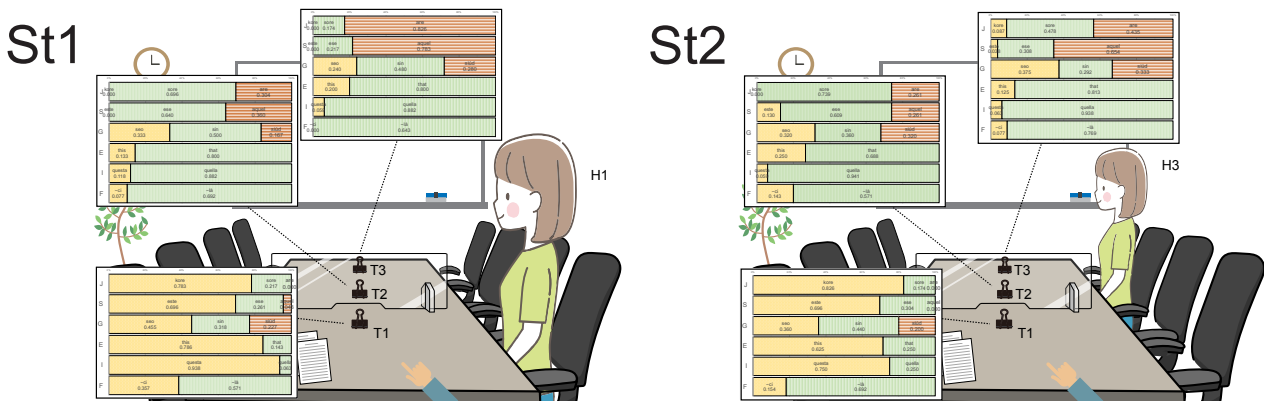


図4 視覚刺激例と特定の基準値(St)に関する実験結果.

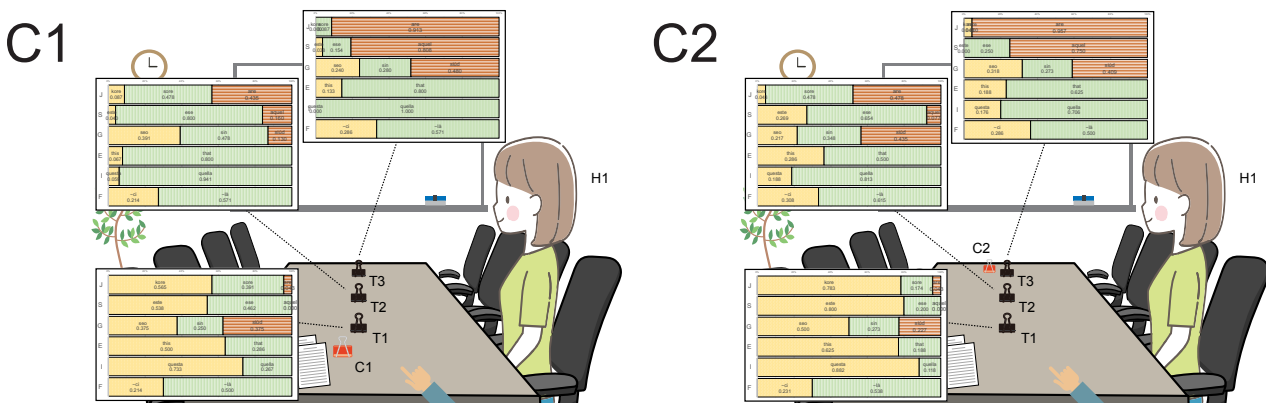


図5 視覚刺激例と比較対象(C)に関する実験結果.

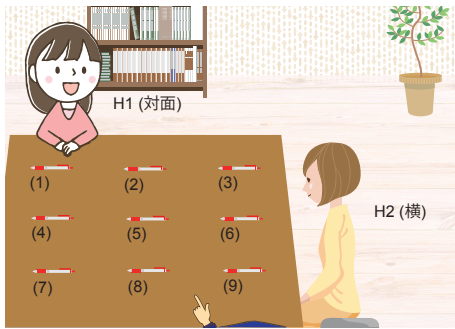


図6 視覚刺激例。

	H(対面)									H(横)									
	T(1)	T(2)	T(3)	T(4)	T(5)	T(6)	T(7)	T(8)	T(9)	T(1)	T(2)	T(3)	T(4)	T(5)	T(6)	T(7)	T(8)	T(9)	
kore	0.000	0.000	0.000	0.043	0.174	0.261	0.391	0.913	1.000	kore	0.043	0.000	0.000	0.000	0.043	0.217	0.130	0.783	0.957
J sore	0.826	0.783	0.348	0.826	0.826	0.565	0.391	0.043	0.000	sore	0.043	0.130	0.261	0.217	0.783	0.739	0.217	0.174	0.043
are	0.174	0.217	0.652	0.130	0.000	0.174	0.217	0.043	0.000	are	0.913	0.870	0.739	0.783	0.174	0.043	0.652	0.043	0.000
este	0.083	0.080	0.000	0.043	0.174	0.280	0.292	0.958	0.962	este	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.115	0.200	0.840	0.960
S ese	0.750	0.760	0.435	0.870	0.826	0.680	0.667	0.042	0.000	ese	0.192	0.174	0.583	0.280	0.875	0.885	0.520	0.160	0.040
aqueel	0.167	0.160	0.565	0.087	0.000	0.040	0.042	0.000	0.038	aqueel	0.808	0.826	0.417	0.720	0.125	0.000	0.280	0.000	0.000
seo	0.478	0.391	0.182	0.400	0.429	0.292	0.364	0.619	0.476	seo	0.238	0.227	0.286	0.318	0.273	0.200	0.429	0.739	0.773
G sin	0.391	0.391	0.682	0.500	0.571	0.375	0.545	0.190	0.286	sin	0.619	0.500	0.524	0.545	0.636	0.600	0.476	0.174	0.136
siúd	0.130	0.217	0.136	0.100	0.000	0.333	0.091	0.190	0.238	siúd	0.143	0.273	0.190	0.136	0.091	0.200	0.095	0.087	0.091
E this	0.063	0.000	0.063	0.133	0.357	0.313	0.133	0.938	0.875	this	0.063	0.071	0.067	0.000	0.063	0.188	0.125	0.813	1.000
that	0.875	1.000	0.938	0.800	0.643	0.688	0.867	0.000	0.063	that	0.938	0.929	0.933	1.000	0.938	0.813	0.875	0.125	0.000
I questa	0.118	0.059	0.059	0.118	0.353	0.235	0.353	1.000	1.000	questa	0.000	0.059	0.059	0.000	0.000	0.353	0.059	0.882	0.941
quella	0.882	0.941	0.941	0.824	0.529	0.706	0.647	0.000	0.000	quella	1.000	0.882	0.941	1.000	1.000	0.588	0.941	0.118	0.059
F -ci	0.429	0.231	0.083	0.417	0.273	0.143	0.333	0.583	0.429	-ci	0.083	0.077	0.250	0.077	0.091	0.500	0.286	0.417	0.583
-là	0.357	0.692	0.917	0.583	0.727	0.714	0.583	0.250	0.357	-là	0.917	0.769	0.750	0.769	0.909	0.500	0.714	0.500	0.333

表1 聞き手(H)と対象物(T)の位置関係に関する実験結果。

を向けると *ko-*の可能性が高まり *a-*の可能性が下がった。一方、Cに関してであるが、図3のH1と比較しても差は見つけられず影響があったとは言えない。一般的に、前半セクションで *so-*を使う可能性が高かったが、これは全てHがいる状況のためであり、中距離かH領域の *so-*かは分別しがたい。だが、表1を見ると、H(対面)はT1,2,4,5でH(横)はT5,6で *so-*が使用される可能性が高く、また個別にT1の結果を見るとH(対面)で *so-*、H(横)で *a-*を使用し、聞き手側の領域というのが形成されているようだ。そして、他の言語と比較してもその性質は強いと言える。

次に、スペイン語であるが、上記の日本語と類似する結果が得られた。まず図3から明らかなように、Hからの視点が考慮されており、これは Rubio-Fernandez (2022) の実験結果とも一致する。但し、比較して日本語ほどその性質は顕著に現れていない。興味深いのは表1の結果であり、中称 *ese* が、H(対面) T1,2,4,5 の状況とH(横) T5,6 の状況において相当数(3/4以上)使用されており、日本語のソ系のようなH側領域を形成している結果が得られた。相互主観的な指示詞使用をし、かつ中称の指示詞を持つ言語で、聞き手側領域に中称を使うことが多いのか、さらなる検証は必要である。また、Stの影響に関して言えば日本語より明確な差が出ており、T1でより近称、T2/3でより遠称が使われやすくなった。一方で、Cに関しては日本語同様、指示詞選択に影響力はみられなかった。さらに、同じ3種類の指示詞システムを有するアイルランド語に関して、前述したように母語判断として少し不透明性があるだけでなく、上記の日本語やスペイン語のような明確な実験結果は得られなかった。例えば、表1でH(対面)の状況下でT1でもT9でも同じような結果となり近称 *seo* を使うことが多く、当言語の資料も少なくその理由に関して未だ不明である。同言語に焦点化した別の実験研究が必要である。

以下では残りの、二項対立的な指示詞システムを持つ言語(E, I, F)に関して結果を議論する。まず英語に関して、Hからの距離判断はあまり考慮されなかった。興味深いのは、日本語やスペイン語とは逆に、HがSから遠くなると(H1→H4)遠称 *that* を利用する可能性が高くなる点である。間主観性が働けば距離感は短くなるはずで、つまり Coventry et al. (2008) などの実験結果と同様に *distance-oriented* であることを示す。ここで *that* が選択されるのは、「H側にある」(日本語で「そちらの」)という意味によりそのような結果が出た可能性がある。但し、表1の方ではそのような傾向は見られずHの位置関係はあまり影響を与えなかった。さらに、他の言語と異なりStだけでなく比較対象(C)も英語話者の指示詞選択に影響を与えた。Cと比べて近い/遠いという判断をしており、英語の場合、なにかしら絶対的な判断基準を求めやすいということかもしれない。

次に、イタリア語であるが、英語と同様に *distance-oriented* の性質が非常に明確にみられた。つまり、Hの位置とは無関係に指示詞選択がなされた。しかし、英語 *that* のような「相手側にある」という意の使用は特に現れなかった。また同様にStとCの効果も一部認められたが、英語ほど強くは現れなかった。最後に、フランス語であるが、前述のとおり、同言語の指示詞は *ce* 一つであり遠近判断はないとされるが、*-ci* と *-là* という名詞句に付随する接辞によって *this, that* のような役割をはたす (Diessel 2005)。実験結果は解釈が少し難しいが、英語やイタリア語同様に、Hの位置に影響されず *distance-oriented* であると言える。さらに、StとCの存在は日本語やスペイン語と同様にあまり影響は与えなかった。また、同言語では *-ci* を付随させずとも近接を表すことができ、それによるか定かではないが、全体的に *-ci* を選択することが比較的少なかった。

## 4 おわりに

本論は、絵の視覚刺激を用いて、直示用法の指示詞の使用に関して言語横断的 (cross-linguistic) にオンライン実験調査を行った。実験結果の詳細は前節の通りであるが、重要な結果を以下に3点述べる。(I) 日本語とスペイン語で間主観的 (intersubjective) な遠近判断がみられただけでなく、共通して中称の指示詞に聞き手側という領域区分の性質がみられた。(II) 日本語とスペイン語で特定の基準値 (St) の影響があり、英語とイタリア語では加えて比較対象 (C) の影響があった。(III) 日本語とスペイン語とは逆に、英語では H が S から離れると遠称が使用され、つまり *that* に相手側の領域を意図する機能がみられた。但し、これら全ては一実験の結果に過ぎず、今後追試により再検証を行う必要がある。

最後に方法論的側面から示唆を述べる。本論は個別言語 (例えば、日本語) を深く掘り下げる研究というより、言語横断的に同じ研究対象 (指示詞の直示用法) に関する差異を発見することを目指す研究である。しかし、一般的に比較させることで個別言語に対しての特徴や性質を浮かび上がらせることができ、個別言語研究への還元が同時に可能である。例えば、本論の比較・対照実験から日本語は間主観的で H との位置関係を重視する言語であると明確になる。さらに言えば、言語学の方法論は決して一様ではなく、様々な言語に対して多様に工夫された科学的アプローチがなされており、それらを日本語など個別言語現象に適用・応用させる、または本論のようにそれらを基に新たな手法を構築することは、方法論が豊かになり新たな側面の発見に繋がる可能性が高くなる。

## 参考文献

- Coventry, Kenny R., Berenice Valdés, Alejandro Castillo, and Pedro Guijarro-Fuentes. 2008. Language within your reach: Near-far perceptual space and spatial demonstratives. *Cognition* 108: 889–895.
- Diessel, Holger. 2005. Distance contrasts in demonstratives. In M. Haspelmath, M. Dryer, D. Gil, and B. Comrie, eds., *The World Atlas of Language Structures*. Oxford: Oxford University Press.
- Forbes, John. 1848, 2010. *The principles of Gaelic grammar; with definitions, rules, and examples in English and Gaelic*. Kessinger Publishing.
- Kemmerer, David. 2019. *Concepts in the Brain: The View from Cross-Linguistic Diversity*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, Robin. 1972. Remarks on ‘this’ and ‘that’. *Proceedings of the Chicago Linguistics Society* 9: 229–246.
- Levinson, Stephen C. 2018. Demonstratives: Patterns in diversity. In M. J. Dunn, N. J. Enfield, S. Cutfield, S. C. Levinson, and S. Meira, eds., *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*, pages 1–42. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peeters, David, Zeynep Azar, and Aslı Özyürek. 2014. The interplay between joint attention, physical proximity, and pointing gesture in demonstrative choice. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society* 36:1144–1149.
- Peeters, David and Aslı Özyürek. 2016. *This and That revisited: A social and multimodal approach to spatial demonstratives*. *Frontiers in Psychology* 7: 1–4.
- Piwek, Paul, Robbert-Jan Beun, and Anita Cremers. 2008. ‘Proximal’ and ‘distal’ in language and cognition: Evidence from deictic demonstratives in Dutch. *Journal of Pragmatics* 40: 694–718.
- Rubio-Fernandez, Paula. 2022. Demonstrative systems: From linguistic typology to social cognition. *Cognitive Psychology* 139: 101519.
- Sugaya, Yusuke. 2015. Inside the mental mechanism of evaluation processing. *Papers in Linguistic Science* 21: 153–182.
- Sugaya, Yusuke. 2020. *Constructing Evaluations: The Meaning-Making Process of Adjectives*. Ph.D. thesis, Kyoto University.
- Sugaya, Yusuke. 2022. Interpreting spatial scenes for choice of demonstratives: A psycholinguistic contrastive study between Japanese and Chinese. *Studies in Language and Culture* 48: 205–227.
- Yoshimoto, Kei. 1986. On demonstratives KO/SO/A in Japanese. *Gengo Kenkyu* 90: 48–72.
- 佐久間鼎. 1951. 現代日本語の表現と語法. 東京: 恒星社厚生閣.
- 史セン. 2011. 日中指示詞の対照研究. 博士論文, 一橋大学大学院言語社会研究科.
- 時本真吾. 2015. コソア使用個人差の実験記述: 現場指示と非現場指示の関わり. *計量国語学* 30(1): 1–13.
- 服部四郎. 1968. コレ, ソレ, アレと this, that. 金水敏・田窪行則 (編), *日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞*, 47–53. ひつじ書房.
- 田窪行則. 2010. *日本語の構造: 推論と知識管理*. 東京: くろしお出版.
- 吉田光演. 2014. 日本語・ドイツ語・英語の指示詞の比較に関する一考察. *欧米文化研究* 21: 31–64.